



ある卒業生の修養日誌

新しい年を迎えるということは、裏を返せば、その分だけ年をとっていくということですから、元気なうちでなければ出来ない身の回りの整理を少しずつ始めようという気分になってきました。若い時分からお世話になった書籍の類は、膨大なものになっているものですから、この際残したいものは残し、もう読むこともないだろうと思うものは、そろそろ処分したいと。

それに刺激されて家内も、自分の本棚を整理し始め、私の家内は、初等部の卒業生であるものですから、そんな中からもう半世紀も前に毎日書き留めた「修養日誌」が何冊も出てきました。装丁は、今のものとほとんど変わらず、私も息子も興味をもって眺めながら、当時の記録を、時に笑いながら、時に感心しながら、夕食後の一時を過ごしたわけです。

日誌の中には、西ドイツ（当時）のリュプケ大統領が鎌倉を訪れたこと、鶴見事故当日のこと、ケネディー大統領が暗殺されたこと、石原裕次郎、デール・ロバートソン主演の「ある兵士の賭け」のモデルになったジョン・O・アーン少佐が自宅を訪ねたこと、そういった歴史的出来事も見受けられます。

ある日の日誌には、こうあります。「家へ帰ってからしばらくしたら、パパがかえっていらっしゃいました。やはりねつが『七ど八ぶ』ちょっとありました。それから足をもんでから、べんきょうしました」。また、ある日の日誌には、こうあります。「今日も朝コー茶にはちみつを入れたら又黒っぽい色にかわりました。ちょっとふしぎです。おしえてください」。

これに、担任の先生が赤ペンで誤字を直し、必要に応じ仮名を漢字に替え、ルビまでふって、丁寧な感想を書いておられるわけです。「親孝行をしましたね。大事にしてあげましょうね」。「大学の方で食品の中に何がふくまれているか分かる^{ぶんせきひょう}分析表で調べていただきましたら、他のさとうと比べてはちみつは鉄分が八倍位多いので、紅茶にふくまれているタンニンというものはちみつの鉄分が^{かごう}化合してタンニン鉄ができるからではないかということが分かりましたが、まだ実験をして確かめていないのではっきりはわかりません。そのうち時間をつくってしらべてみましょう」。

私や息子でさえ、ある種の感慨^{ふけ}に耽ったわけですから、50年ぶりに目を通した家内にとっては、感慨一入のものがあったことでしょう。

本学では、その伝統が今に絶えることなく続いているわけです。伝統というものは、それが学校の伝統であれ、民族の伝統であれ、どのような規模の伝統であっても、DNAのように自然に受け継がれていくものでは決してなく、多くの人々が意図的・意識的に伝えていこうと努力しなければ、絶対に継続してはいかないものです。

毎日修養日誌をつけている児童・生徒の努力は、相当なものでしょうし、また丹念に目を通し、コメントをつけて下さる先生方のご苦勞も、相当なものでしょう。

修養日誌は、毎日の反省や感想、あるいは出来事が綴られたり、一日一善の決意が述べられたり、自分の夢や思いが語られたりと、自ずと豊かな表現力の形成や厳しい自己対象化にも資するものとは思ってきましたが、ただそれだけでなく、50年後自分の家族と一緒に記憶の彼方に置き忘れていた思い出を呼び起こし、当時の自分の生活環境や心象風景をリアルに再現し、そこに重ねあわせてある人は今の時代を読み取ることもあるでしょう、またある人は自分の子どもの成長を読み取ることもあるでしょう、何れにしても想像以上の広がりや奥ゆきをもったものであることに思い当たりました。

ご指導下さる先生方もまた、一人の子どもの修養日誌に書きつけた自分の言葉が50年後別な形で甦^{よみがえ}っていくことを想像してみると、教育という仕事は、目の前の一人ひとりの個人に向けられた働きではあるにせよ、しかしそれに止まらず、自分の言葉が新しい世代の心に薫^{くんじゅう}習し、自分の見知らぬ人々の中で新しい言葉となって復活していくものであることに思い至ることでしょう。カントは、『教育学』の中で、教育を個人のみならず人類の活動を通して達成される、神の創造の意図と目的に適った合目的な活動と捉えましたが、若い頃やや大仰^{おおぎょう}に聞こえたその意味を、私もようやく実感出来てきたように思います。

[>前のページへ戻る](#)